

5 佐渡近海発見の珠洲焼

新潟市在住の本間慶次氏が所蔵している珠洲焼2点について資料紹介を行う。所蔵資料は、本間氏の記憶によれば、昭和の初め頃底引き漁によって佐渡近海から引き揚げられたことを、祖父から聞かされたという。

この珠洲焼は、吉岡康暢氏のいう壺T種中壺A I 2と考えられる〔吉岡1994〕。1は、器形は底部から外傾して立ち上がり、胴部は球卵形を呈して肩が強く張り出し、上半に最大径を有する。頸部は短く直立し、口縁は外反して端部に面を持ち、頸部から口縁部の形状はコの字状を呈する。法量は、口径20.4cm・底径15cm・器高35.5cm・最大径31cmである。タタキメは右下がりで粗く、底部から3~8cmくらい上方まで施されているが、タタキが弱いためにナデの痕跡が残る。底部外面には指頭圧痕、胴部内面には当て具痕が認められる。底部の底面は滑らかであることから、海揚がり後に研磨された可

能性が大きい。色調は灰白色で、海揚がりを示すかのように、器外面には貝殻の付着が認められる。

2は、1とほぼ同様の器形であるが、胴部は1に比べてやや膨らむ。法量は、口径19.8cm・底径14cm・器高34.5cm・最大径31.2cmである。タタキメは右下がりで、底部から2.5~5cmくらい上方まで施されている。胴部内面には当て具痕跡がみられる。底部外面には指頭圧痕、底面は砂底で、板状の圧痕が認められる。色調と貝殻の付着は、1と同じである。

これらの珠洲焼の編年的な位置を考えてみると、胴部の形状に若干の違いがあるものの、両者はほぼ同じ形態をとることから、同時期の可能性が高い。口縁端部に面を持ち、口頸部は短く、形状が「コ」の字状、胴部は球卵形を呈するという両者の特徴は、珠洲陶器編年のI期を中心に、II期までおよぶ。口縁部の形状からすると吉岡編年のI 2期に位置づけられる。
(寺崎裕助)

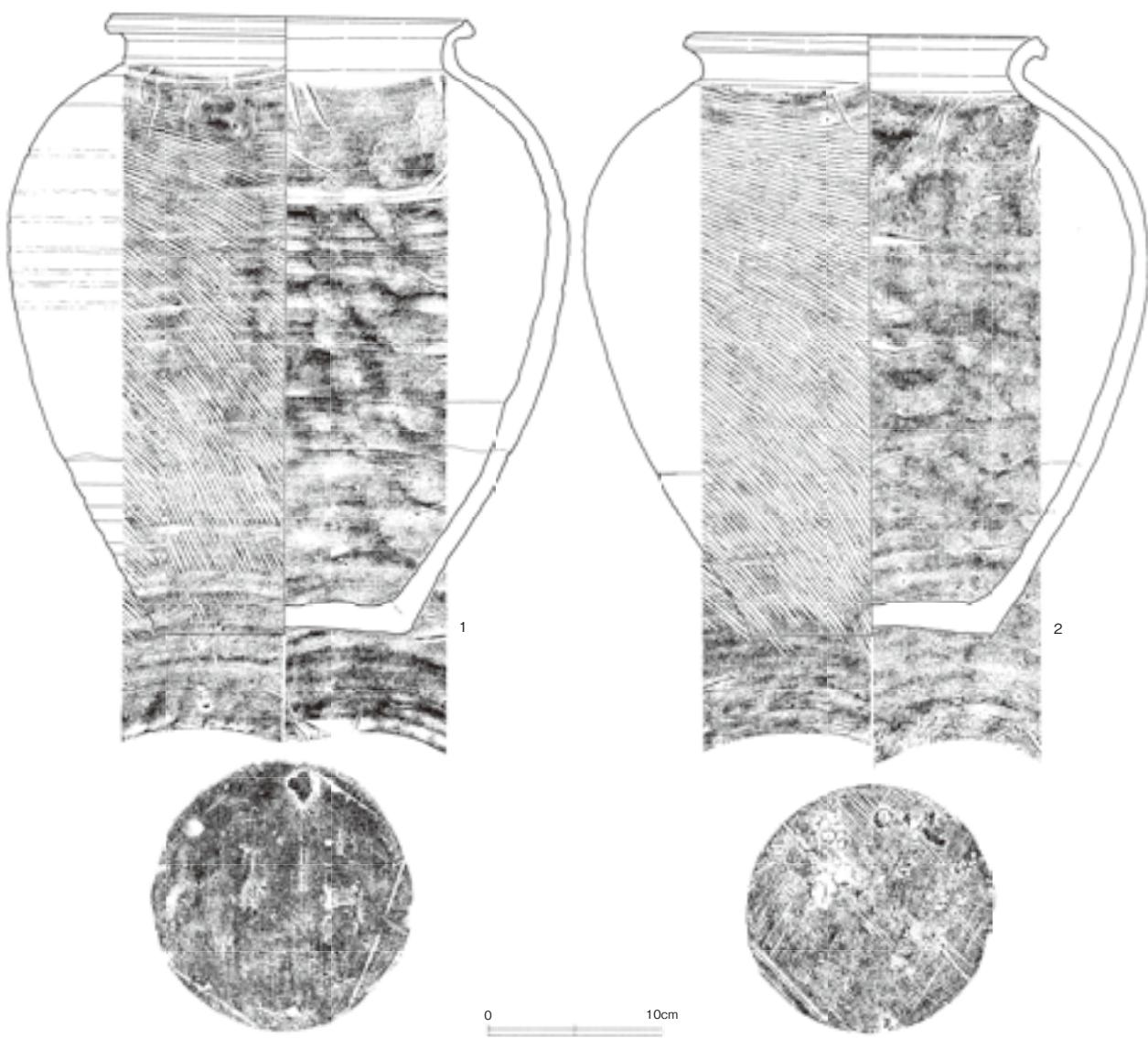


図7 珠洲焼実測図（1/4）



図1-1



図1-2



図2



図3-1



図3-2



図4-3



図4-4



図 4-5

図 4-6



図 6-1

図 6-2



図 7-1

図 7-2